

武蔵野幕屋創立38周年聖書講筵 祈祷会

投火

――ルカ伝第12章49～50節――

1978年9月24日

小池辰雄

パリサイ どん底 心の癌 自己義認が偽善 畏神 聖霊はまばゆき黄金の火 私たち自身が
 霊火体となる キリストの中に霊火づけになる 十字架の贖いと聖霊のバプテスマ 祈りは十
 字架から聖霊の世界へいく 祈り

【ルカ12・1…53】

1その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合うばかりなり。イエスマズ弟
 子たちに言い出で給う『なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽
 善なり。2蔽おほわれたるものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬものは
 なし。3この故に汝らが暗きにて言うことは、明るきにて聞こえ、部屋の内
 にて耳によりて語りしことは、屋の上にて宣のべらるべし。4我が友たる汝ら
 に告ぐ、身を殺して後に何を為し得ぬ者どもを懼おそるな。5懼るべきものを
 汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。われ汝
 らに告ぐ、げに之を懼れよ。……

49我は火を地に投ぜんとて来きたれり。此の火すでに燃えたらんには、我また
 何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらる
 るまでは思い逼せまること如何許いかばかりぞや。51われ地に平和を与えんために来きたると思
 うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。52今より後、一家に五人
 あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。53父は子に、子は父に、母
 は娘に、娘は母に、姑しゅうとめは嫁に、嫁は姑に分れ争わん』

●パリサイ

ルカ伝11章の53節に、

53此処より出で給えば、学者・パリサイ人ら烈しく詰め寄せて様々のことを
 詰なりはじめ、

キリストに対していろんなことを非難する。

54その口より何事をか捉とらえんと待ち構えたり。

あしざまに考えて、何とかしてキリストを陥おとしれようとするパリサイです。それから、12章



1節、

「その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合うばかりなり。イエスマズ弟
子たちに言い出で給う『なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽
善なり。』」

これは腐らせる酵母、偽善者ですね。要するに、パリサイというのが宗教界のひとつの
癌みたいなものです。

「パリサイ人のパンだね」

という。「パリサイ」というのは即ち「分かれたる者」という、自分たちは他の者と分か
たれたる者という意味あいの言葉です。宗教的、道徳的特権階級だと思っている。そして、
他を審くわけです。宗派根性というのがみんなこのパリサイなんです。自分の信仰箇条、
また教会や集会の在り方を、

「こうでなければならぬ」

と他を批判する。政治の世界でも、イデオロギーによって他のイデオロギーをあしぎまに
言って、あるいはまた、どうしても自分のイデオロギーの方に他人を入れようとする。政
治的な世界でも、また宗教の世界でも、共通にこのパリサイ根性というのがあるわけです。

また、そればかりではなくて、人間が本来もっている自己主張、自己弁護、これがみん
なパリサイに通ずるわけです。自分を善しとして他を悪しとする。商売の方でもそうでしょ
うね。とにかく、人間のいるところにはパリサイ根性というものはつきものだ。キリスト
が一番敵にしたのはこのパリサイなんです。取税人、遊女、いろんな病につかれた者、そ
ういった人たちはむしろ天国に近い。しかし、己を義とするところの、自己義認の、自己
主張のパリサイが実は天国に遠いんです。己を善し（義）とするから。

●どん底

キリストは、

「なぜ、私のことを善いと言うか」

と言って、自己を、己を善しとなさらなかった。

「神の他に善きものはなし」

と。それが、私が「無」「無者」と言わざるを得ないわけなんです。キリストの言葉に、

「己を卑うする」

とありますけれども、その「卑うする」もどん底なんですよ、「無者」というのは。どん底
です。

私は無教会の流れにいた。無教会はいわゆる立派なんだ。いわゆる立派な信仰また実存、
これが知らぬまにパリサイになって硬化現象を起こして、そして、

「真実でない」



だの、何だのかんだのと人を審く。そういうところに私はずっといた。藤井先生は「真実」

ということをよく仰ったけれども、その「真実」という言葉もややもするとこれはパリサイになる。

だから、私は「砕け」と言わざるを得ない。キリストは砕けのひとであると。謙遜なんていうよりもひとつ奥の世界です。神さまを100%に立てる世界は、自分が砕けであり、平伏しである。平伏し砕けの魂は詩篇51篇に、

「¹⁷神のもともめたもう祭物そなえものはくだけたる靈魂たましひなり。神よなんじは砕けたる悔い

しこころをかるしめたもうまじ」(詩篇51・17)

とあるとおりです。

キリストは手放しで砕けでありましたけれども、我々は手放しで砕けになれない。だから、「罪びと」

ということ是要するにパリサイ根性がどこかにあるということなんだ。わがうちなるパリサイと先ず戦わなければいかんわけですよ、

「パリサイ、パリサイ」

と言うけれども。無教会の畑に私はいたから、その無教會的、パリサイ的ポーズは嫌なんだよな。それで、私は除け者にされてしまった。除け者にされたのはこつちが本ものだからと、逆に言いたいわけだ。

「本もの」

ということとは、自己義認で言っているのではない。神さまの福音の、キリストの本ものがやってきた。自分の側には立場も足場も何もない。無立場です。

●心の癌

だから、

「パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善なり」

という。私たちの心の中にあるところの

「パリサイ人のパン種」

は自分をダメにし、人をダメにする。パリサイ根性は人間の心の中の癌なんだよ。身体の癌に対しては、心の癌なんだ。自己主張のパリサイ根性、これが「罪」というやつです。罪というのは要するに神さまを立てない、キリストを立てない。自己を立てる。どんなにそれが善きものであっても、自己を立てる限りはダメなんだ。

そういうことを言うと、これは普通の道徳の世界では分かります。道徳的に結構なことが相対的現実では結構なことです。主義主張もそれぞれなければどうにもならないという、相対的な現実ではそういうことも言える。



「ちつとも主義がないじゃないか」
なんてなわけだね。

ところが、そういった主義的パリサイ的判断からもうひとつ抜けないとダメです。それぞれのイデオロギーはそれぞれの善きをもっている。善きをもっているけれども、これを主張したら、これがパリサイになる。これはある限界をもったところのものですから。ある善きイデオロギーというものは、これを本当によく使うためには、もうひとつ高い次元からこれをつかまえていなければダメです。その中に自分がいたらダメなんです。自分はこつちの高い方にいなければ。あるいは逆に言うと、一番低いところに。どつちでもいい。一番高いところと一番低いところは、これはまた一つなんです。

「いと高きものは、心の砕けた者の中に住む」

という。イザヤ書57章15節。天の星と、深淵しんえんに映る星とは相呼応している。

●自己義認が偽善

そういう相対的判断の絶したところから見えていくと、今度は、相対的判断のいろいろなことがオリエンテーション、位置づけすることができ、その限界をちゃんと見極めていくことができる。これは何と言ったらいいかな。要するに、ここの中に入ってしまうと、これは光の世界、白光の世界だから、白光の世界でこれを見るわけです。これは色がついてない。無色。無色の光。無色の光だから、その善さと限界とが見える。ここに来たらもうパリサイ根性から抜ける。パリサイ根性から抜けるためには、絶対的なものの中に入らなければダメなんです。だから、やれ

「カトリックだ、プロテスタントだ、無教会だ、教会だ、幕屋だ」

なんて言っている世界じゃない。もうひとつ、キリストの中に——申し上げているとおり、
「エン・クリスト」(キリストの中に)
です——キリストの光源の中に入ってしまう。

これは光源であり、光はまた火である。この烈々たる太陽のごときキリストの中に入る。中に入っていれば、みんな焼きつくされてしまうよ。そして、自分自身が火になってしまう。まあ、この譬でいうならばね。

だから、

「パリサイ人のパンだねに心せよ」

とキリストは言われるけれども、

「心せよ」

なんて言っても、何か同じ次元で心したってダメですよ。その「パリサイ人のパンだね」を本当にもうひとつ大きな高所から見れば、本当に自分がパリサイから抜けければ、キリストの言われる「心せよ」が楽に受けとれることになる。



自己義認が偽善なんですよ、いいですか。自己義認ということが偽善なんです。何か偽りの悪いことをしているということではない。自己義認そのことが偽善なんですから。パウロが、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言っている、それが偽善なんです。それにパウロはキリストにぶつかって分かったんです。それでもう、こんな「律法の義につきては責むべきところなし」という立派さなんていうものは

「塵芥の如く」

したんだ、パウロは。もの凄いんですから、これは。まあ、普通のあれでは分からないんだよな、やつぱり。

そういうところに魂が突き抜けなければ、いつまでたっても、何かおかしいですよ。私は自分が無教会の出身だから、しょっちゅう「無教会」と言うんだけどね——しようがないけれども、悪口言っているのではないですよ——無教会というようなものが何人来たって、私はびくともしない。それで、

「アウトサイダーにされて、ああ結構でした。あんた方の中なんかいてたまるか」というわけだよ。私は歴史が無教会にいたものだから、つい出てくるんだけど、あの中誰かが本当に私のような境地に来てごらん。

「やつぱり、あんたの言っていることは本当だ」

と、誰かそういうのが現れないかと待っているけれども、ひとつもやって来ないな。気の毒になってしまうよ。

●畏神

12章5節に、

5 懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。

「殺したる後」というのは、私たちの身体を殺した後に。

「ゲヘナ」

とは永遠の罰を与えるところの地獄のことです。即ち、神さまを懼れよということ。神さまはゲヘナになる。神さまの権威、神威だな。神権です。キリストは自分を無者にしたらば、本当の神権者になった。神の権威をもつひとになった。だから、

「学者の如くならず、権威ある如く」

語るキリストにびつくりしたとある。学者なんてものは大したことはない。いわゆる善悪や何かを分別している、いわゆる分別の世界を超越した世界に入らなければ本当ではない。このことは柳宗悦がよく書いている。あの人をよく分かっている人だ。



われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。

神さまを懼れよと。キリストは本当に——畏神、——神を畏れた。神をおそれるといふのは、こわがるのではないですよ、畏神というの。神の前に本当に平伏して、自分を何ものともしないということが畏神ということ。そうすると、この神を畏れる——その権威と言いますかね——神権なるものがこっちへやってくる。

●聖霊はまばゆき黄金の火

まあ、いろんな問題がありますね。

「どうにもでもなりやがれ」

と、さっきの

「ヤケクソ信仰」

にならないければダメですよ。そして、絶対に毅然きぜんとしてなさい。相対的現実で争う必要はひとつもないから。

「耐え忍ぶ」

というけれども、耐え忍ぶためには、聖霊の力が来ていれば堪え忍べるんです。そして、相手を担ってしまふ。あるときはバカみたいな顔して、ニコニコして笑っていればいい。

「ああそうですか」

と、白隠和尚のようにね。悪口でも何でも全部引き受けてしまふ。相対次元で争っているうちはダメなんです、もうひとつ奥の世界の中にいなければ。

どんなことがあっても——さっき、殉教の二十六聖人の話がありました——みんな本当にキリストが化体していたような魂です。マルチン・ルターは

「自分もあのフスのように焼かれていいんだ」

と、そういう覚悟でいた。死んでも死なない、焼かれても焼かれないものが、これが今日私たちが祈祷会でいうところの火なんです。

「心頭滅却すれば火もなお涼し」

と言うが、

「心中に霊火あれば火もなお涼し」

ということ。ダンテがよくもの凄いい形容の仕方をするけれども、

「普通の火もまだ氷のようだ」

なんて言う。霊火は赤い火よりも凄いいんだ。赤い火はまだ見えるよ。けれども黄色い輝く火はまぶしくて見えない。まぶしくて目がくらんでしまふ。そこの火事の火は赤い。赤い火ではなくて、黄金色の火。霊光。瞑想の中でうかんでくるのはこの黄金の火です。赤くない。金色をしている。聖霊は正にまばゆき黄金の火です。



● 私たちが自身が霊火体となる

そこで、「パリサイ人のパンだね」は即ち、心の魂の癌だが、それから抜けるためにはキリストの黄金の火を受けとらなくてははいかん。これがルカ伝12章49節の、

49 我は火を

霊火を、

地に投ぜんとて来れり。

ということ。パリサイだねを焼きつくしてしまう。罪を焼きつくしてしまう。もう「罪」という言葉はよそうや。むしろ、自己義認式なパリサイだよ。パリサイが罪の一番なんだ。キリストの最大の敵はパリサイだったんだから。

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と、マタイ伝23章で畳みかけて七度も言っているでしょ。キリストがああの方に「学者」と言ったのは、「教法学者」のことです。モーセの律法に詳しい連中。パリサイはそれを大いに拳々服膺けんけんふくようしていると自己義認している連中です。そういった者たちです。

「ああ、我は悩める者なるかな」

と言って、キリストによりすがる者は、キリストは捕まえてしまう。悲しむ者、泣く者、悩める者、求むる者は、みんなこれはキリストに救われていく。

「俺は大丈夫だ」

なんて、自分を偉がっているようなやつは、これはパリサイです。

だから、祭司だの教師だのがよつてたかつて、そういつたご連中にキリストが敵にされて、孤軍奮闘――奮闘どころじゃないけれども――孤軍になることはもう当然なんです。キリストは、

「私は神さまから火をもらっているんだ。この火を投じようと思つてやつてきた」

と。火人、霊火のひとなんだ。この一句なんです、私が今皆さんと読みたいのは。12章の49節だけなんです。さつきずっと読んでいただきましたけれども。この

「火を投ぜんために」

と、霊火を投じようと思つて来た。いや実に、キリストのある所に霊火が燃えていた。本当にそうです。だから、この霊火の中に自分を投身させて、私たちが霊火現象を起こさなければダメです、私たちが自身が霊火体にならなければ。

「霊火体」

とはいいい言葉だな。楽しくなるね。霊火体になつてくださいますよ。今日はもう徹夜して祈りたくなつてしまう――ウソだよ、ウソだけれども――山の中ならやるけれども、都会ではやるわけにいかない。

「この霊火を地に投ぜんためにやつて来た」

ということですよ。



此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。
 「あなた方の中にこの火が燃えたら、もう私はいいんだよ。もう運命環境がどうなるうと、必ずそれで勝つていけるよ」
 と。いいですか。

「環境がどうだ。運命をどうするか」
 というようなことは第二義的なことで、第一義的なことは自分自身が霊火体となることです。問題はただ一つ。そうしたら、回りが

「何だか知らんけれども、これは大変なやつだな。もう私は相手にならん、参りました」

と。無刀流になってしまいうわけだ。

ルターはエネルギーシユなやつだね、彼は旧約聖書を12年間で全部訳してしまったんだよ。劇的な12年間で訳してしまった。暇の中で12年間かかったのではない。1522年に新約聖書ができて、1534年に旧約聖書が全部できてしまった。それがもうドイツ語の土台になってしまった。

学生が、勉強がどうの、時間がどうの、やれ塾がどうの、予備校がどうのなんてね、本当におかしいよな。自分でもって閉じこもって、一卷に食いついて、一遍でも二十遍でも読んで、一冊を本当にこなしてごらんよ。もうそれで天下無敵になってしまふ。そういう根性のある勉強の仕方をしないんだね、この頃の学生というのは。やっぱり、昔の人たちの方が本当の実力があつたというのは、自分でもって本当に苦しんでやつたもんですよ。宗教は本当の他力がいいけれども、勉強の世界では他力はダメだよな、相対的な他力なんてものは。

●キリストの中に霊火づけになる

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

「あなた方の中に、私が与える霊火が燃えたら」

と。ある時は、

「この水を飲んだら、もう永遠に渴かないぞ」

と言われた。ヨハネ伝4章、

「わが与うる水を飲む者は永遠に渴くことなし」

と。不尽の水が、泉が湧き出る。活泉である。こちらはまた、炎々として燃えて尽きない。太陽のように。大変なものだね、あの太陽というやつは。太陽を瞑想するだけで、もう凄いことになるよ。キリストを瞑想しながら、キリストの霊火の中に霊火づけになってごらんよ。そうしたら、エライことになってしまふんだ。湖の上も渡ってしまふかもしれないぞ。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべ



きバプテスマあり。

十字架の事です。

その成し遂げらるるまでは

その十字架の贖罪死を成し遂げるまでは、

思いせま逼ること如何いかばかり許ぞや。

と。

「霊火を投じようと思うんだが、今は投じられない。この火がお前たちに臨んだら、また何をか望まん。だけれども、この火が燃えるためには私はバプテスマを受けなければならぬ。お前たちのその自我、我執、パリサイ根性を根こそぎにしてやるんだ」

と、キリストは苦しんでいるんだ。「根こそぎにしてやる」というのは、

「全部、私が引き受けて、背負ってしまおう」

ということですよ。相対的な我々が自分で「根こそぎに」なんかできるものですか。いつまでたつたつて同じようなものです。人間というやつは、いくらいわゆる信仰を持ったつて、それでどうかなつてしまいましたか。なかなかならないでしょうが。パウロですら、

「ああ、われ悩める人なるかな、この死からだの体」

と言つたでしょ。

万人は本当に救いを要する。そんな立派もへツタクレもないんですよ、本当は。それを相対的に

「ああ、あの人は立派だ。ああだ、こうだ」

なんて、もうよしてくださいよ。もうひとつ奥の世界で、そんな評価を絶したところになると――これは私は第一流の坊さんの心境がわかるんですけれども。だから、そういう意味で、私は第一流の坊さんたちが好きなんだ――いわゆるキリスト教の神学者や牧師なんてのはとてもケタがそこまですってない。使徒たちは別ですよ。

●十字架の贖いと聖霊のバプテスマ

キリストが、

「我には受くべきバプテスマあり」

と言われる。いいですか、ルカ伝12章の49節と50節は忘れることのできない二節です。この二つを本当に、このキリストの本願の呻き叫びを受けとればエライことになる。50節が十字架の贖いで、49節は聖霊のバプテスマです。そういうことです。

「この十字架の贖罪死を遂げたら、お前たちに火をあたえるぞ」

と。これがペンテコステの火なんです。各々の中に入ってきたでしょ。

「今、私はお前たちにこの火を投じたいんだけど、やりたいんだけど、ダ



メなんだ。私が十字架にかかったら、この火は本当に燃える。燃えたらもう何もいらん。それで行け」

と。そうして、

「この火が燃えると、平和ではないぞ、争いが来るぞ」

と。そこに渦巻きが始まる。

51 われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。

分争である。これはいわゆる何とか紛争とは違う。こういう言葉が書いてあるものだから、

「キリスト教というのはけしからん宗教だ。家庭の不和を持ってくるじゃないか」なんて悪口言われる。

52 今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。53 父

は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑しゅうとめは嫁に、嫁は姑に分れ争わん』

と。

「それだったら、どうにもならないじゃないか。家庭破壊じゃないか」

なんて。キリストというひとは、条件付けてこういうことを言われるものだから、躓きなんです。本ものとウソものとはどうしても合わないからそうなるけれども、本ものが必ず勝つて、そして本当の平和がやってくる。一人びとりがこの主を受けると、本当の平安がくるから――いつも申し上げているとおり、縦の平安がくるから――そうしたら、今まで分かれていたものが本当の平和になる。

私は今度は本当の第一線に立つから。もう私は戦いの将来が楽しくてしょうがない。神さまは何をなさるかと思つてね。こうなったら、私は無制限の人間になりますから。もう遠慮することはひとつもないんだ。

「されど、我には受くべきバプテスマあり」

と。キリストはこの私たち、どうにもならん者のために十字架でもつて全部、贖罪してくださった。もうたまらんです、キリストの十字架は。だからもう無条件に、あるがまま、そのままキリストの中に自分を投げ入れて、電光石火、霊火現象が起きる。我々は霊火体となる。事実、霊火体ですよ、これは。だから、病氣なんかとつかないんだ。少し風邪ひきそうになったら、グーツと祈りなさい。そしたら、内側からの熱でもつて、そんなに加減な熱をすつとぼしてしまうから。そういう意味で、少しキチガイにならなくてはダメですよ――「気違い」という言葉は躓きになるから困るけれども――普通の気とは違ふんです。次元の違った気になることを今、

「気違い」

と言つた。気が違う、次元の違った気になる。

「狂えるならば神のためなり」



とパウロが言ったでしょ。

●祈りは十字架から聖霊の世界へいく

それでは、祈りに入りましょう。もうこの二節をその意味でつかまえたならば、何が起きても、最後は本当の勝利である。相手を担い、相手を包んでしまつて、本当の――平和よりも、歓喜だな――喜びの世界に変えてしまう。天国に変えてしまう。

私は兄貴のこういう字を見ていると、昨日書いてくれたかと思うんです。それくらい生き生きしているんです、この兄貴は。もう半世紀以上の前の文字だけれども、これを見るだけで私は靈感が来てしまう。

私が先に祈りますから、あとは自由に祈ってください。しばらく黙禱します。なるべく、静かな深い祈りをします。もう祈りは、沈黙の世界だつて、いくらでも深いところに入るんですから。今のキリストのあの二つの言葉をよく心の中できなえてください。

「我に受くべきバプテスマあり。思い迫ることいかばかりぞや。汝らにこの火を投ぜんためにきたれり。この火燃えたらんには何をか要せん」

と。順序は逆です。十字架から聖霊の世界へいく。

●祈り

憫みあわれ深きまさま。この38年間、まことに蹉蛇さだたる歩みのダメな僕しもべですが、あなたはなお忍び赦し、力強け、ここまで導いてくださいました。感謝いたします。今、御前に、私の兄の日をもつて出発したこの集会の記念祭をこのようにして、いわゆるお祭でない祭をこの兄弟姉妹たちが心一つにしてここに集まつてくださいって、感謝しております。

私たちは今、存在存、即使命命の、天来の使命のかかつている、あなたの偉大な歴史の一環を承つているところのものです。神の歴史に関与しているところの私たちであることを聖名の故に自覚して、いよいよこれから本番の戦いに向かって進んで行こうとする、あなたの深きご摂理を感謝いたします。

未だかつてないところの事態がこの幕屋にも起こってきますが、どうぞ、このようにして兄弟姉妹たちと、I兄弟、O兄弟、またU兄弟――今ここにいませんが――それらの兄弟たちの群と共に、いよいよ本当のあなたの体としてのエクレシアを展開し、そして、聖名のご栄光にあずかり、またご栄光を顕していただきたく、証者となりたく存じております。いよいよ、まさま、そのように捉とらえてくださるよう願ひ奉ります。

あなたは、

「わが受くべきバプテスマあり」

と言つて、ついに十字架にかかり、私たちの一切を、過去・現在・未来にわたつての一切を、あなたは贖いとおつてください、無条件にそのまま私たちを救いに入れて、



「この火を燃やす。汝の中にこの霊火を燃やす」

と言つてくださいます。私たちは「然り、アーメン」と答えて、この火の中に、あなたの霊火の黄金のまばゆき火の中に入れられ、そして私たちは火と燃え、もつとも生命的なこの火の中に入れられて、主さま、いよいよ進んで参ります。

これを熄ひすものではありません。これを殺すものではありません。本当に感謝です。そして、このようにして兄弟姉妹たちと、ああ熾さかんなるかな、この本当の歓喜、ハレルヤを全存在をもって歌いつつ進んでまいります。どうぞ、兄弟姉妹たちのそれぞれの場におけるところの業わざを、あなたがその聖名の故に祝福し、聖名の故にそこに栄光を顕してくださいるように願ひ奉ります。

かくして本当に、望みなきところに本当の天来の望みがやってきます。そしてまた、八方塞がりのところに、自在に展開していくことのできる驚くべきことがこの一人ひとりを通して展開することを信じて、聖名を讃え奉ります。

あなたの弟子たち、パウロもペテロもヨハネもみな聖霊を受けてから、そのようなことになりました。私たちもまた――器の大小はどうであつてもいいです――みな質的に同じものが各自のつぴきならぬものとして表れることを信じて聖名を讃え奉ります。

いろいろな問題を今かかえています、何も懼れませんが、ただこの火が燃えれば、もはや一切のことは未解決のうちに解決していることを信じ受けとり、あなたの勝利を受けとつて進んでまいります。私たちがまことのイスラエルであることを信じて感謝いたします。この兄弟姉妹たちと進んでまいります。

親しき兄弟姉妹たちがそれぞれの所でこの日を覚えていますが、どうぞ、彼らをまた祝福し、同じ凱歌をあげて、この日を終わることができまますように願ひ奉ります。今、心からの感謝と讚美、聖名により献げ奉る。アーメン。

